

Title	人文科学から社会科学への歴史学の転換：フランソワ・シミアンの歴史的方法批判をめぐって
Sub Title	History's shift from humanities to social sciences : an exploration of François Simiand's criticism of the historical method
Author	矢野, 久(Yano, Hisashi) 難波, ちづる(Nanba, Chizuru)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2015
Jtitle	三田学会雑誌 (Mita journal of economics). Vol.108, No.2 (2015. 7) ,p.455(185)- 472(202)
JaLC DOI	10.14991/001.20150701-0185
Abstract	<p>歴史学と一口にいってもさまざまなアプローチの仕方がある。どのように過去の事実に接近するのか、その事実性も含めてこれまでさまざまな議論がなされてきた。多様な議論を突き詰めると、人文科学としての歴史学と社会科学としての歴史学の対立という問題に遭遇する。とりわけフランスでは社会科学としての歴史学への転換が早い時期にみられ、また、数量化へのアプローチが鮮明であり、その意味でこの対立は先鋭化していたように思われる。本稿では、人文科学から社会科学への歴史学への転換に際して、フランスではどのような議論が闘わされてきたのかを、社会学者で経済学者であるフランソワ・シミアンの研究を通して考察する。</p> <p>Various theoretical approaches fall under the umbrella term : the study of history. There has been much discussion on the way to approach the facts of history, including the nature of facts themselves. The essence of this discussion can be boiled down to the conflict between the approach that treats history as part of humanities and the approach that treats history as a social science. In France, the shift towards treating history as a social science was seen relatively earlier than elsewhere, and especially the preference of the shift for a quantitative approach had become apparent. Therefore, it is thought that the theoretical division has further intensified in this country. In this paper, the debate that took place in France at the time history was going through a shift from humanities to social sciences is considered in the light of the research of sociologist and economist François Simiand.</p>
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20150701-0185

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

人文科学から社会科学への歴史学の転換

——フランソワ・シミアンの歴史的方法批判をめぐって——

矢野 久* 難波ちづる**

History's Shift from Humanities to Social Sciences:

An Exploration of François Simiand's Criticism of the Historical Method

Hisashi Yano* Chizuru Namba**

Abstract: Various theoretical approaches fall under the umbrella term —the study of history. There has been much discussion on the way to approach the facts of history, including the nature of facts themselves. The essence of this discussion can be boiled down to the conflict between the approach that treats history as part of humanities and the approach that treats history as a social science. In France, the shift towards treating history as a social science was seen relatively earlier than elsewhere, and especially the preference of the shift for a quantitative approach had become apparent. Therefore, it is thought that the theoretical division has further intensified in this country. In this paper, the debate that took place in France at the time history was going through a shift from humanities to social sciences is considered in the light of the research of sociologist and economist François Simiand.

* 慶應義塾大学経済学部
Faculty Economics, Keio University

** 慶應義塾大学経済学部
Faculty Economics, Keio University

はじめに

「歴史学の危機」が叫ばれて久しいが、実証的歴史研究者はこの危機にはあまり関心を示さず、一方、危機を指摘する者は実証的歴史研究を実践していない研究者がほとんどである。しかしこの危機は言論界・思想界においては実証的歴史研究自体を否定するほどの大きな影響を与えている。本稿の課題は、実証的歴史学の立場から、この歴史学の危機で叫ばれている基本的な問題を解明することにある。その一つは、一言でいえば、「人文科学的」歴史学と「社会科学的」歴史学との対立であろう。この両者が並存する「歴史学の現在」をその歴史的な成り立ちに遡って明らかにし、「人文科学的」な歴史学からどのようにして「社会科学的」な歴史学が成立・展開したのか、どのような対立がみられたのかを明確にすることをねらいとする。

かつて歴史学は、史料の批判的、解釈学的検討によって歴史的事実に到達しようとする歴史主義的歴史学であった。しかし19世紀末以降、歴史学は一定の理論的仮説を出発点として史料を分析することによって歴史的事実を説明する社会科学的歴史学へと転回する過程に入る。その後歴史学は、歴史主義的歴史学もナショナル・ヒストリーとして活性化しつつ、多様性を孕みながら、社会科学的方向に突き進んでいった。20世紀前半にこうした歩みを最も早く進めたフランスでは『アナール派』第二世代といわれる歴史家たちが、1950年代以降、数量的手法を歴史学に積極的に導入する。さまざまな種類の統計資料を駆使した数量史が確立され、これ以降、それまでの「人文科学的」歴史学が「社会科学的」歴史学へと大きくシフトするようになる。一方、歴史主義的歴史学が色濃く残ったドイツでは数量化の道をとることなく、しかし社会科学的理論を駆使した歴史学が登場し、比重は後者におかれるようになる⁽¹⁾。

19世紀から20世紀にかけての世紀転換期フランスでは、歴史主義的歴史学に対する批判が積極的に行なわれ、その後の『アナール派』成立に大きな影響を与えた。歴史学以外の分野からの批判の要として哲学者アンリ・ベール Henri Berr (1862–1954) がいたことは周知のことといっても過言ではないだろう。学問的総合をめざしてベールは、社会学との協同に依拠しつつ、「総合としての歴史学」を打ち立てようとし、このことが、後に『アナール派』を核とするフランス社会史の土壌を形成することに大いに影響を与えた⁽²⁾。フランス社会史の土壌を形成したのはベールだけではない。歴史学以外の分野から歴史主義的歴史学批判を展開し、フランス社会史の一つの流れである数量的

(1) 第二次世界大戦後のフランスとドイツにおける歴史学の歴史的な発展の共通性と差異性については、矢野久「1950・60年代西ドイツ歴史学とフランス・アナール学派」『三田学会雑誌』105巻4号(2013年1月)、1960年代後半から70年代半ばにおけるドイツの社会科学的歴史学については同「『歴史的社会科学』の成立——1960年代から70年代半ばのドイツ社会史群像——」『三田学会雑誌』108巻1号(2015年4月)参照。

歴史把握に大きな影響を与えた人物として、社会学者で経済学者のフランソワ・シミアン François Simiand (1873–1935) が挙げられる。後の時代において、価格の歴史を核にした経済史と人口史の統合、地域研究と時系列研究による社会史へと繋がっていく道を提供した。⁽³⁾

本稿では、シミアンを具体的な事例として取り上げ、初期の社会科学的历史学の方法論と歴史学的方法論を明らかにすることを課題とする。全体は2章から構成され、まず第1章ではシミアンがどのような研究者であったのかを概観する。続いて第2章ではシミアンの論稿「歴史的方法と社会科学⁽⁴⁾」(1903年)を取り上げる。フランスの伝統的な歴史学者ラングロア／セニョボス Charles-Victor Langlois/Charles Seignobos の『歴史学研究入門⁽⁵⁾』とセニョボスの *La méthode historique appliquée aux sciences sociales* (社会科学に应用された歴史学の方法⁽⁶⁾) において展開された歴史学の方法論との比較を行ないつつ、シミアンの伝統的歴史学批判と社会科学的历史学の内容を考察する。

第1章 フランソワ・シミアンの経歴と研究業績

第1節 シミアンの経歴

シミアンは、フランス・イゼール県のジエール (Gière) という町で生まれた。公立学校の教員をしていた父親は早世したため、奨学金を得ながら、グルノーブルのリセを経て、パリの高等師範学校 (École normale supérieure) で学び、1896年に哲学の中・高等教育教授資格 (agrégation) を取得した。シミアンの関心はその後経済学に向かったため、哲学を研究領域とすることはなかったが、哲学を学んだことは、彼の思考や方法論の確立の上で重要な根幹をなしている。そして1904年には、論文「フランスにおける炭鉱労働者の賃金」で博士号を取得した。⁽⁷⁾

シミアンが研究上最も大きな影響を受けた人物は、社会学という当時の新興学問の成立に大きな

(2) Dieter Groh, *Kritische Geschichtswissenschaft in emanzipatorischer Absicht*, Stuttgart u.a., Kohlhammer, 1973, S.75; Winfried Schulze, *Soziologie und Geschichtswissenschaft. Einführung in die Probleme der Kooperation beider Wissenschaften*, München, Wilhelm Fink Verlag, 1974, S.69 ff.

(3) Groh, *Kritische Geschichtswissenschaft*, S.75; Michael Erbe, *Zur neueren französischen Sozialgeschichtsforschung*, Darmstadt, WBG, 1979, S.30; Schulze, *Soziologie und Geschichtswissenschaft*, S.69; Matthias Middell, “Die unendliche Geschichte”, in: *Alles Gewordene hat Geschichte. Die Schule der ANNALES in ihren Texten 1929–1992*, Leipzig, Reclam, 1994, S.16.

(4) François Simiand, “Historische Methode und Sozialwissenschaft”, in: *Revue de Synthèse historique*, 6, 1903, in: *Alles Gewordene hat Geschichte*.

(5) Charles-Victor Langlois/Charles Seignobos, *Introduction aux études historiques*, Paris, Hachette, 1898. 邦訳、セニョボス／ラングロア『歴史学研究入門』八本木浄訳 (校倉書房, 1989年)。

(6) Charles Seignobos, *La méthode historique appliquée aux sciences sociales*, Paris, Félix Alcan, 1901.

(7) Ludovic Frobert, *Le travail de François Simiand*, Paris, ECONOMICA, 2000, pp.9–10.

功績を残したエミール・デュルケムÉmile Durkheim (1858–1917) であった。統計データを駆使し、「社会的事実」(fait social) を「科学的」に把握しようとしたデュルケムにシミアンは強く共感し、1898年から1912年にかけて、デュルケムが創刊した雑誌『社会学年報』(Année sociologique)の経済学部門を率いている⁽⁸⁾。

シミアンは、当時の政治経済学、地理学、歴史学、そしてデュルケム学派以外の社会学などの諸学問は、科学としての厳密さを欠き、社会現象の複雑さを正確に認識できていないと考えていた。そして、「社会的事実」を個人的、主観的なものに還元する立場を否定し、現象は「モノのように取り扱わなければならない⁽¹⁰⁾」とするデュルケムの立場に立脚し、現象の「因果関係」を厳密に確定することを重視するデュルケム派社会学こそが「実証的」社会科学の基本的な方法論を提示しようと考えた⁽¹¹⁾。

シミアンは生涯を通じて、とりわけ経済変動という現象に関心を持ち、それに関する多くの業績を残した。その代表的なものとして、論文「25年間にわたるフランスの石炭価格の変動と形成」(1925年)⁽¹²⁾や、近代ヨーロッパにおける価格変動と変動の原因を分析した著書『価格の一般変動に関する古くて新しい研究』(1932年)⁽¹³⁾などがある。また、それまでの研究を総括し、景気変動のメカニズムとその生成を実証的に説明した、全三巻からなる大著『賃金、社会変動、通貨』(1932年)⁽¹⁴⁾を出版した。同じく1932年に、18世紀以来の経済危機と価格変動の関係を検証した論文「長期経済変動と世界経済危機⁽¹⁵⁾」を発表し、1934年には分析対象をアメリカ経済とした『インフレーションと通貨安定の循環——アメリカ合衆国における経済発展⁽¹⁶⁾』を公刊している。

これらの研究においてシミアンは、長期間にわたる膨大な統計資料を駆使している。彼が統計資

(8) Marina Cedronio, «Présentation» in: François Simiand, *Méthode historique et sciences sociales* (réimpression), Paris, Éditions des Archives contemporaines, 1987, p.3.

(9) とりわけ、デュルケム派の雑誌、*Année sociologique* のライバル誌であった *Revue internationale de sociologie* の周辺にいる社会学者たちが提唱する「有機体的社会学」をシミアンは批判していた。(Marina Cedronio, «Présentation», *op. cit.*, pp.7–8.)

(10) エミール・デュルケム『社会学的方法の基準』宮島喬訳(岩波書店、1978年)、90頁。

(11) François Simiand, «Science sociale et réalisme sociologique», in: Simiand, *Méthode historique et sciences sociales*, pp.80–83.

(12) François Simiand, «La formation et les fluctuations du prix du charbon en France pendant vingt-cinq ans, 1887–1912», *Revue d'Histoire économique et sociale*, 13, 1925.

(13) François Simiand, *Recherches anciennes et nouvelles sur le mouvement général des prix du XVIème au XIXème siècle*, Paris, Domat-Montchrestien, 1932.

(14) François Simiand, *Le salaire, l'évolution sociale et la monnaie. Essai de théorie expérimentale du salaire*, Paris, Domat-Montchrestien, 1930–1932.

(15) François Simiand, *Les fluctuations économiques à longue période et la crise mondiale*, Paris, Alcan, 1932.

(16) François Simiand, *Inflation et stabilisation alternées: Le développement économique des États-Unis (Des Origines coloniales au temps présent)*, Paris, Domat-Montchrestien, 1934.

料を重視するようになったのは、彼の経歴も大きく関係しているであろう。シミアンは、大学に職を得るまで、商務省 (Ministère du Commerce) と労働省 (Ministère du Travail) に 10 年以上にわたって勤務しており、フランス経済に関わるさまざまな統計資料を扱う機会に恵まれていた。⁽¹⁷⁾ 1919 年にはフランス国立工芸院 (Conservatoire national des Arts et Métiers) の教授となり、高等研究実習院 (École Pratique des Hautes Études) 教授、パリ統計学協会 (Société de statistique de Paris) の会長を経て、1932 年にはコレージュ・ド・フランスの労働史講座の教授となった。⁽¹⁸⁾ シミアンはまた、アカデミックな世界においてだけではなく、経済政策の実務分野でも活躍している。軍備・軍事製造省大臣アルベール・トマ Albert Thomas (1878–1932) の下では、第一次世界大戦期のフランス経済の合理化と再編に携わり、1919 年から翌年にかけては、アルザス・ロレーヌ地方の労働・労働法・社会保険局の局長をつとめた。⁽¹⁹⁾ このような彼の実務経験もまた、社会的事実を正確かつ「全体的」に把握することに専心した背景にあるかもしれない。

第 2 節 シミアンの研究業績

社会現象の正確な把握のために、何よりも統計的資料を重視したシミアンは、大量の数値データを用いることによって、現象の個別性、独自性やディテールではなく、その「全体」を複雑さのなかに捉えることができると考えていた。⁽²⁰⁾ また、数量的認識を重視する一方で、「意図的に概念的で簡略化した仮説」を打ち立て、「抽象的な分析」を演繹的に行なうことによっては、「無限に複雑な現実」を認識し説明することはできないとしている。⁽²¹⁾ 「ホモ・エコノミクス」という概念に疑問を呈し、この抽象的なモデルでは、最小の努力による最大の効用を追求するために多くの選択肢が存在する複雑な経済世界を把握することはできないと考えていた。「個人的効用」という概念についても、それを「さまざまな次元に区別すること」、さらにはそのなかで「利己主義、自尊心、もしくは正当な自己愛」なのか、「即座に欲求を充足することを追求するのか、もしくは、最終的に欲求を最大化することの追求」なのか、または、「広く同意された欲求、あるいは同意されにくい欲求」なのか、などといった区別を厳密に行なうことの重要性を指摘した。シミアンはこのような厳密な区別は、哲学や倫理学においては「常套手段」であるが、経済学においてはこうした方法が無視もしくはないがしろにされてきたと述べている。⁽²²⁾

(17) Frobert, *Le travail de François Simiand*, p.12.

(18) Cedronio, «Présentation», pp.4–5.

(19) Frobert, *Le travail de François Simiand*, p.191.

(20) François Simiand, «Compte rendu de A. Bowley, *Eléments de statistique*», *Année Sociologique*, 5^{ème} année, 1900–1901, p.473.

(21) François Simiand, «La méthode positive en science économique», in: Simiand, *Méthode historique*, p.320.

(22) François Simiand, *Critique sociologique de l'économie*, (Textes présentés par Jean-Christophe Marcel et Philippe Steiner), Paris, PUF, 2006, pp.44–46.

具体的な研究のなかでシミアンは、賃金が労働力の需給関係で決定されるとする経済理論に疑問をもち、統計データを集め、長期間にわたる物価と賃金の変動を詳細にたどり、それらが一定のサイクルで上昇と下降の変動を繰り返すことを明らかにした。A 段階、つまり上昇期においては、物価の上昇がみられ、続いて所得の上昇が起きる。このことは、雇用主も労働者もそれぞれの努力を最小限にとどめるように作用する。続いて現れる B 段階、つまり後退局面では、資金の削減によって物価の下落が引き起こされる。これは将来に対する不安によって生じ、投じた資金を回収することができないのではないかという懸念が支出を控えさせ、そこから物価の下落が発生する。労働者も雇用主も、それ以降、貨幣収入をなんとか維持しようとする努力を増大する傾向を示す。労働者の努力によって生産性が上昇し、雇用主は、より少ない費用で生産するための努力、すなわち機械化や組織の合理化を行なう。つまり、名目所得の減少に対する抵抗が、生産におけるなんらかの改善を引き起こすのであり、成長と技術進歩は、これらの周期的変動から生じる集団行動に起因するとシミアンは考えた。⁽²³⁾

シミアンは、統計的資料を駆使して「観察される事実」を厳密に提示すると同時に、マクロ社会的な変数間の関係を説明し、明確な因果関係を打ち立てることを強調する。因果関係を確立することによって、真の原因を見極めることが可能となり、ある出来事の原因、すなわち最終的に他の要素に置き換えることの絶対不可能な先行現象と、その出来事を起こすために必要な「条件」を区別することを主張した。また、因果関係とは「安定した関係、規則性、法則」を有するのであり、⁽²⁴⁾ある出来事の原因を「個人の動機」に還元する解釈を否定する。ところでシミアンは、経済変動に関する自らの研究においてもそうであったように、現象を分析する際に、行為者の心理的要因を重視している。しかしそれは、「個人の心理」ではなく、「集合的心理」もしくは「社会的心理」というべきものであり、⁽²⁵⁾決して個人的意識の次元の問題ではない。行為者の行動は、資力や財の関係によって生じる変化によって条件づけられるが、これは個人の意識を超えた「集合的理性」(raison collective)によって牽引されると考える。⁽²⁶⁾行為者の行動や反応によって生じる集合的な表象は、個人の意識には直接依存してはおらず、それを超越したものだとしミアンは把握している。「心理的なもの」は「主観的なもの」とは区別しなくてはならないのであり、⁽²⁷⁾因果関係は、唯一のものである個人的現象に関しては確立しえないとする。⁽²⁸⁾

(23) Jean-Christophe Marcel et Philippe Steiner, «Présentation générale» in: Simiand, *Critique sociologique de l'économie*, pp.16-17.

(24) François Simiand, «La Méthode historique et Science sociale», *Annales, Economies, Sociétés, Civilisation*, 15^{ème} année, no.1, 1960, p.95.

(25) Simiand, *Critique sociologique de l'économie*, p.49.

(26) Simiand, *Le salaire, l'évolution sociale et la monnaie*, p.518.

(27) Simiand, «La Méthode historique et Science sociale», p.86.

(28) Simiand, «La Méthode historique et Science sociale», p.95.

以上述べたように、シミアンの研究の特徴として、社会現象、とりわけ経済現象の社会学的な分析、個人的もしくは主観的なものの排除、そして長期的分析による経済サイクルの重視を挙げることができる。そしてそれは、シミアンが行なった歴史学批判に通じている。

第2章 歴史的方法とシミアンの社会科学的方法

本稿で何を争点にしているのか、あらかじめ明確にしておきたい。伝統的歴史家、ここではセニョボス／ラングロアの歴史学認識論は簡単にいえば次のようになる。「歴史的事実」は「間接的」にしか知ることができず、歴史的認識は本質的に「間接的な認識」である。歴史学の方法は、「直接的観察」にもとづく他の科学とは異なり、過去の事実が残した跡＝「史料」を出発点とし、そこから「推論」という方法で「過去の事実」に到達する⁽²⁹⁾。史料から出発して推論を経て歴史的事実にいたるこの間接的な「歴史的方法」が「過去の事実」に到達する唯一の方法⁽³⁰⁾であるということになる。

それに対してシミアンは、伝統的歴史学における過去の出来事の研究は、事実の観察ではなく記録であり、しかもこの事実は厳格に定義されておらず、したがって歴史的方法は一連の批判的予防措置を講じている、と批判する⁽³¹⁾。社会現象を扱う実証的科学たる社会科学も直接的観察ではなく間接的な認識に依拠する⁽³²⁾といえ、伝統的歴史学は事実から一定の学問体系を構築する、つまり事実を分類し配列しまとめて一つの構造物にするのであって、社会科学では事実の組合せそのものが社会科学の「意図」に依拠しており、ここに社会科学との対立があるとみる⁽³³⁾。

第1節 モノと客観性

歴史学が考察の対象とする過去の事実について、伝統的歴史学はどのように捉え、それに対してシミアンはどう捉えようとしたのか。まずはこの問題から検討しよう。

セニョボス／ラングロアによれば、「歴史家の想像する事実は、必然的に主観的なものである」⁽³⁴⁾。歴史家は「史料のなかに点在する特徴」から、「自分で見て自分の記憶にとどめた現代の事実に類似する」ものとして過去の事実のイメージを描くという。社会状況、行為、動機、感情などはあいまいな言葉でしか表現できないし、民族、軍隊、産業、市場、革命など「さらに複雑な事実ともなれば、用語はさらにあいまいなものになる」。このあいまいさをさらに危険なものにするのは、「歴史学のイメージによる表現という間接的な方法」であるという。この歴史学のもつ方法論上の問題を

(29) セニョボス／ラングロア『歴史学研究入門』、50頁。

(30) 同上、51頁。

(31) Simiand, “Historische Methode und Sozialwissenschaft”, S.168.

(32) Simiand, “Historische Methode und Sozialwissenschaft”, S.169.

(33) Simiand, “Historische Methode und Sozialwissenschaft”, S.170.

(34) セニョボス／ラングロア『歴史学研究入門』、178頁。

克服するためには、セニョボス／ラングロアは、主観的に想像された「全体」を把握し、その上でこの全体の一部を構成する「人間や事物や行為」の「相互の関係（国家、政府、法律、戦争）」をもあわせて過去の事実と歴史家のイメージの違いを「想像する」ことが肝要であるという。⁽³⁵⁾

歴史学においては、「社会的な事象は心理的な性格のものである。心理的であるがゆえに社会的事態は主観的である」と想定されているとみなすシミアンは、社会現象が人間と外的世界のモノ、あるいはモノに関連した人間同士の関係であり、心理的なものであることを認める。それに対して、社会現象が主観的なものだとすることには異議を唱える。実証的科学は客観的領域で作業しているがゆえに、社会的事象が主観的であれば社会科学は崩壊してしまうという。セニョボスにおいてはそもそも心理的なものと主観的なものの混同にこそ問題があり、⁽³⁶⁾客観的・主観的なものの明確な定義と正確な意義づけが重要であるとする。⁽³⁷⁾

シミアンはとくに「モノの概念」が重要だとする。客観性はモノに内在する属性ではなく、モノ、外的世界の事物は、経験的認識の観点からすると、抽象によって一つの全体へと形成された知覚の全体性にすぎない。⁽³⁸⁾シミアンによれば、社会現象は「客観的には他でもないわれわれの個人的自発性からは独立しているということの意味する」⁽³⁹⁾（下線はシミアン）。個々の社会現象の諸要素は人間諸個人の個別的な自発性からは独立しており、それは実証的認識にとって、いわゆる外的世界が物的であるようなモノであるという。その上でシミアンは、概念化される抽象がまずは現実を構築し、⁽⁴⁰⁾科学的認識が可能となるように現実を作り出すことであると強調する。

ここに両者の対立は決定的となる。セニョボス／ラングロアは、事実は「ある種の内在的な力で進化するという閉鎖的な世界」を形成するわけではなく、「制度（言語、宗教、教会、国家）の進化」とは「抽象観念」であり、したがって本来の意味で進化するのは「存在するものだけ」（下線はセニョボス／ラングロア）であると主張する。人間の状態に変化を与える「出来事」は同時に「人間の諸習慣にさまざまな点で変化を与える」ものであるという。後に検討するように、セニョボス／ラングロアにおいては、この「存在するもの」は人間の行為に起源をもつ出来事である。⁽⁴¹⁾

セニョボスは、「社会的事実」は抽象にすぎない、この現象が社会的であるためには、「人間諸個人もしくは諸集団の行動、状態、物的依存関係」でなければならず、社会的事実を知るためには「人間諸個人」に到達しなければならないとする。⁽⁴²⁾セニョボスは社会的発展の客観性を否定して、唯一

(35) セニョボス／ラングロア『歴史学研究入門』、179–182頁。

(36) Seignobos, *La méthode historique*, p.124, 174 und passim.

(37) Simiand, “Historische Methode und Sozialwissenschaft”, S.171.

(38) Simiand, “Historische Methode und Sozialwissenschaft”, S.173.

(39) Simiand, “Historische Methode und Sozialwissenschaft”, S.174.

(40) Simiand, “Historische Methode und Sozialwissenschaft”, S.175 f.

(41) セニョボス／ラングロア『歴史学研究入門』、201頁。

(42) Seignobos, *La méthode historique*, pp.214–215.

の連続性を諸個人の主観的な原因による類似性の一連性とみなす。⁽⁴³⁾

それに対してシミアンは、このモノたる人間の諸個人は知覚と精神に関連する概念であり、認識の過程は同じ仕方で経過するものであり、科学的作業は「一つの抽象である科学的事実に携わっている」(下線はシミアン)とする。⁽⁴⁴⁾セニョボスのように教会をアプリオリに聖職者に限定すれば、社会宗教的な現象の大部分を排除することになり、政府や民主主義政党ではなく統治者や民主主義者に限定すれば現実性を看過することになるという。シミアンは両方とも重要であり、規則性や法則性の発見には「適切な抽象」、したがって論理的過程こそが実証的科学の形成にとって不可欠であると主張する。⁽⁴⁵⁾

この対立は史料と史料を扱う学問の把握の仕方の対立においても示される。セニョボス／ラングロアによれば、「直接的な観察の科学は、現実の完全な物体を取り扱う」。これは「実在的総合」⁽⁴⁶⁾であり、「科学とは、実在するものの分析、総合、比較にもとづく客観的な認識である」。それに対して歴史学においては、「実在するものは、なにも見ることができない」。歴史的事実を見ることができないのと同様、「史料分析」は実在しないし、「単なる抽象的な技術」、「完全に知的な作業」、「頭のなかでの探究」にすぎない(下線はセニョボス／ラングロア)。それは、「実在する対象物を見出すための客観的な方法ではなく、単にわれわれの印象のもととなる抽象的な要素を見つけるための主観的な方法にすぎない」。「歴史学は、使われるべき素材の本質そのものからいって、必然的に主観的な科学である」⁽⁴⁷⁾。歴史学の「方法論に関する基本的な問題」を「解決するための唯一の方法」はこのことを自覚することである。⁽⁴⁸⁾

伝統的歴史学は、実証的科学のモデルに従う社会科学に反対するが、研究領域の認識条件に依存するとして、シミアンは伝統的歴史学における史料を検討する。史料は「研究する精神と研究される実態との媒介」であり「主観的性格」をもつというセニョボスに対し⁽⁴⁹⁾、シミアンによれば、史料の作家による個別の動機・行動・思想を媒介としての個別の出来事(史料)ではなく、「制度」に向かえば「直接事態に迫る」ことが可能になるという。習慣、集合的表象、社会的諸形態はしばしば「無意識に登録され、史料として残される」ので、「研究作業の作家による現実的媒介」(下線はシミアン)によって把握されうる。⁽⁵⁰⁾

数量化に関して、セニョボスは量的考察方法には懐疑的である。量的な知への直接的な手法はな

(43) Seignobos, *La méthode historique*, p.229.

(44) Simiand, “Historische Methode und Sozialwissenschaft”, S.177.

(45) Simiand, “Historische Methode und Sozialwissenschaft”, S.181.

(46) セニョボス／ラングロア『歴史学研究入門』, 175頁。

(47) セニョボス／ラングロア『歴史学研究入門』, 176頁。

(48) セニョボス／ラングロア『歴史学研究入門』, 177頁。

(49) Seignobos, *La méthode historique*, p.270.

(50) Simiand, “Historische Methode und Sozialwissenschaft”, S.193.

く、間接的な方法しかないという。規模の測定、数の測定、推算、標本抽出、いくつかのケースの一般化など数量化の可能性を挙げて批判の対象とする。セニョボスは、選択した単位体の類似性、代表性、単位体の数の多さという慎重さを施すことで、標本抽出が可能だとはするが、これによっても確実な結論には到達できないという⁽⁵¹⁾。それに対してシミアンは、社会現象の測定可能性に関して、社会現象の数量化は間接的であるとはいえ、他の科学、自然科学と本質的な対立があるわけではないとして数量化を評価する⁽⁵²⁾。

第2節 「原因」——〈一回性〉か〈繰り返されるもの〉

伝統的な歴史学と社会科学との対立はとりわけ歴史的变化の「原因」をめぐって最も熾烈なものとなったといっても過言ではない。歴史的事実が「相反する二つの側面」から、すなわち、「個別的、特殊的、一時的なもの」ならびに「集団的、一般的、継続的なもの」から考察できるとすれば、セニョボス／ラングロアによれば、歴史学にとっては「一般的な事実の研究と特殊な事実の研究との双方を調和結合すること」が重要であるとする。とはいえ、「最終的には排除することのできない何かが残る」、これこそ「まさしく歴史の要素」だということになる⁽⁵³⁾。

伝統的歴史学においては、歴史学は「異なる時点での社会の諸状態を研究して、その相互の差異」、この変化の探求、「継続的な事実の研究」である（下線はセニョボス／ラングロア）。この変化のなかで、歴史構成にとって最も重要なのが「同じ方向に生じる変化」（「進化」）であり⁽⁵⁴⁾、その変化の「始まり」こそが歴史学にとって「唯一特異な事実」であり、これが「ある社会状態の形成とその進化の始まりとを説明してくれる」とセニョボス／ラングロアは主張する。この唯一特異な事実ゆえに、歴史学は、「事実のあいだの一般的な関連性に関する抽象的な知識」ではなく、「実在するものについての説明的な研究」（下線はセニョボス／ラングロア）である。「実在は一回きりのもの」であり、「単独のもの」である進化のなかで発生した諸事実は、「抽象的な法則からのもの」ではなく、「進化の特別な進展を決定する一連の出来事」たる「偶然」の結果だということになる⁽⁵⁵⁾。

「一般史の構成」のためには、変化を説明できる事実を探求する必要があるが、重要なことは、事実が「決定的な力」をもっていたかどうかである。セニョボス／ラングロアによれば、「一連の大変革の出発点となるべき個々の事実」からは、「先験的に個人の働きを否定したり、個人的な事実を排除」してはならず⁽⁵⁶⁾、人物や事件に「時代と時代の境界を画する位置」が与えられる⁽⁵⁷⁾。社会現象は行

(51) Seignobos, *La méthode historique*, pp.200–213.

(52) Simiand, “Historische Methode und Sozialwissenschaft”, S.194.

(53) セニョボス／ラングロア『歴史学研究入門』, 194頁。

(54) セニョボス／ラングロア『歴史学研究入門』, 199頁。

(55) セニョボス／ラングロア『歴史学研究入門』, 200頁。

(56) セニョボス／ラングロア『歴史学研究入門』, 202頁。

(57) セニョボス／ラングロア『歴史学研究入門』, 203頁。

動と個別的な起源をもち、「諸個人間の行動、了解、取り決めによってのみ説明可能である」(下線はセニョボス/ラングロア)という考え方である。⁽⁵⁸⁾

これに対してシミアンは、伝統的歴史学の思考習慣を批判するために、歴史学における原因概念を考察する。⁽⁵⁹⁾シミアンは歴史学の三つの原因論のどれも原因概念からかけ離れているという。

第一に、ある事態の原因としての先行事態。歴史家は自分の理念、ミリュエの理念、時代の精神的流行でもって蓋然のとみる現象の関係から出発するという。シミアンは、歴史家の思考に親しい今日の側から、過去の人間の行動、思考様式、動機を表象する伝統的歴史学の「経験的主観的」やり方(下線はシミアン)、こうした恣意的に構成されたものから「説明」すると批判する。⁽⁶⁰⁾

第二は心理学的説明、人間の行動の「動機」。社会現象は体系的研究の過程において複雑性、特殊性、特別な特徴をもつことから、「目的」や「動機」は制度の特殊性や特徴的なものを説明せず、したがって、動機は社会科学から排除すべきだとシミアンは主張する。⁽⁶¹⁾

第三は、人間の「原因的な力」。セニョボスは「原因」と「起動者」を混同しているとして、シミアンは、因果関係は起動者と行動、権力と結果の間におかれるのではなく、原因は法則性のあるところにのみ存在するという。「この意味においては個別の現象はいかなる原因ももってはいない」(下線はシミアン)。シミアンは「一回的な事実から離れ、繰り返される事実」、つまり「偶然的なものを避けて規則的なもの」、「個人的なものを避けて社会的なもの」を研究すべきだと主張するのである。⁽⁶²⁾

このように争点は、変化の始まりを探求することが課題なのか、社会現象の客観的考察による科学的説明が課題なのかということにある。この争点は歴史における「偶然」をどう捉えるのかという問題に連動する。

セニョボス/ラングロアによれば、変化の探求を課題とする歴史学にとって、変化の始まりこそが重要となるが、それを説明するのが「唯一特異な事実」である。実在は一回きりのものであり、これは「進化の特別な進展を決定する一連の出来事」たる「偶然」の結果であるとみなす。「制度(言語、宗教、教会、国家)の進化」とは「抽象観念」であり、セニョボス/ラングロアによれば、本来の意味で進化するのは「存在するものだけ」(下線はセニョボス/ラングロア)である。人間の状態に変化を与える「出来事」は同時に「人間の諸習慣にさまざまな点で変化を与える」ものであるという。⁽⁶⁴⁾

歴史学が個別的なもの、偶然のものに注目するのに対して、シミアンは変化を説明するものとし

(58) Seignobos, *méthode historique*, pp.300–301.

(59) Simiand, “Historische Methode und Sozialwissenschaft”, S.183.

(60) Simiand, “Historische Methode und Sozialwissenschaft”, S.184 f.

(61) Simiand, “Historische Methode und Sozialwissenschaft”, S.185 f.

(62) Simiand, “Historische Methode und Sozialwissenschaft”, S.187 f.

(63) セニョボス/ラングロア『歴史学研究入門』, 200頁。

(64) セニョボス/ラングロア『歴史学研究入門』, 201頁。

ては、たとえ革命的变化においても、小集団のアジテーターなどの出現と行為の偶然性では変化の説明としては不十分だとして批判する。より深い真の原因である社会的分裂、社会的要因が重要であるという。人間的要因の研究が「説明」をめざすのであれば、「個別の偶然的な要素の役割」を明らかにし、偶然が確定され「排除」された後に現象の間にみえる「持続的に規定された関係」を見出すことが重要である、とシミアンは主張するのである。⁽⁶⁵⁾

第3節 事実〈構成〉と座標系

素材の選別に続く歴史学の作業は「歴史構成」であるが、セニョボス／ラングロアは「体系化に必要な一連の組織的作業」を構想している。過去の事実に「類似する」「現在の事実」になぞらえて「歴史的事実を想像する」ことからはじめ、次に、この「想像された事実」を「過去のひとまとまりの事実に類似すると思われる事実になぞらえて想定された枠組み」に「グループ分け」（下線はセニョボス／ラングロア）する、つまり、多数の歴史的事実を集めて「普遍的な枠組み」に「秩序正しく整理」する作業が続く、その先に、それらの事実を凝縮して公式化することで、一般的な性格と相互の関連を引き出すことが可能となるという。⁽⁶⁶⁾ 言い換えれば、歴史学では、「個々の社会の重要な現象の一般的な概観」は「予定される一般的なカテゴリーの諸問題」に位置づけられるのである。⁽⁶⁷⁾

セニョボス／ラングロアによれば、歴史家は選別した事実の「グループ分け」を行なうが、そのための原則は、事実の生まれた「外的条件」、事実の「内的性質（内容）」に求められる。外的条件では事実は時間、場所ないし集団のもとに整理される。一方、事実の内的性質による分類は、「同種の行為に関係する事実」を「人間のすべての活動の研究から先験的に作られるべき仕切り」（下線はセニョボス／ラングロア）のなかに分類する。⁽⁶⁸⁾

これに対しシミアンは、歴史学のカテゴリー化、その座標枠組みの作成の仕方、この分類の原理、指導的理念を批判する。⁽⁶⁹⁾

第一に、物的なものか精神的なものかによる社会現象の根本的区別に対して、シミアンは、文字と言葉は身体的行動から独立して存在するのか、宗教は典礼や儀式など宗教的实践から分離できるのか、道徳は道徳的実践・行為の外側で把握されうるのかと問うて、「物的」と「精神的」の分離は表面的で正当化できないとする。第二に、シミアンは「私的」と「公的」の区別は中世には適応できないし、宗教や道徳における公私、一般的に私的生活と公的生活を結びつける共通性、「社会的」という概念、「法的拘束力」という概念にも疑問を呈する。総じて、歴史学における社会現象の概観

(65) Simiand, "Historische Methode und Sozialwissenschaft", S.189 ff.

(66) セニョボス／ラングロア『歴史学研究入門』, 184頁以下。

(67) Seignobos, *La méthode historique*, pp.138-140.

(68) セニョボス／ラングロア『歴史学研究入門』, 189頁以下。

(69) Simiand, "Historische Methode und Sozialwissenschaft", S.205.

は、現象間の安定的な関係を可視化できるような形で分類されていない、とシミアンは批判する。⁽⁷⁰⁾

シミアンの批判はさらに大きな歴史研究の方法にまで突き進んでいく。シミアンは具体的には、ある国の穀物生産は、同じ国の他の産業部門よりも、他の諸国の競合する穀物生産により密接に依存するという、アメリカのトラスト、ドイツのカルテル、フランスの生産者労働組合の比較研究の方が、米・独・仏それぞれの一国の経済生活全体の研究よりも意味があるとする。⁽⁷¹⁾ ある国の経済組織の全体像に対して、シミアンは、近代的経済生活において大きな意義をもつ「価格現象」こそが、経済組織の本来の基礎、経済制度、ある社会の経済状態を特徴づけるこの根本的全体、すべての個別現象を解明する経済制度にとっての座標系であると主張する。⁽⁷²⁾

シミアンのいう社会科学においては、概念的思考と観察的考察は密接な関連にあり、構成的科学的総合に向かって一歩一歩進む。⁽⁷³⁾ 現象間の法則性を探し、類型と種属を構成する社会科学に対して、歴史家の理念とモデルは、似非科学的概念（主観的構造物あるいは恣意的着想）の無批判的な適用であり、もはや科学のアクチュアルな要請には対応しないとシミアンは批判する。「歴史のための歴史家」(historisierende Historiker) に対してシミアンは、一方で社会現象の歴史学、他方で社会現象の科学があるのではないとして、分析と構成、実証的な情報と帰納的で体系的な実践による社会現象の研究を主張する。⁽⁷⁴⁾

この問題は、歴史学においてさまざまな事実が結びつけられる「連関」に関連する。セニョボスによれば、独立した事実というものは存在せず、人間あるいは人間集団の行動と習慣は相互に関連しており、歴史学はこの連関を認識することを重視している。セニョボスの歴史研究の方法は、さまざまな種類の経済的諸要因をまとめて社会の「社会的連関」に優位をおくものである。セニョボスは、ある社会において、独立した事実は存在せず、一人の人間のもしくは人間集団の行動や習慣は相互に関連しており、互いに影響を与え、互いの原因となっているという。現実には、経済、宗教、科学、政治といった特別な事実はあるのではなく、互いに常に変化する人間と慣習があり、この関係は「複合体」(連関)である。⁽⁷⁵⁾

これに対してシミアンは四つの問題点を指摘する。

第一に、歴史的方法によって社会的「連関」に到達できるのかを問題視し、第二に、個々の社会の制度・習慣・理念などは自ずと理解・説明できるわけでも、また「連関」によって全体に到達できるわけでもなく、同じ制度・習慣などの他の地域との「比較」だけが分類と理解を可能とするという。第三に、有機体の関連、有機的個体の諸機能の相互関係の研究はすでに抽象であり比較であり、

(70) Simiand, "Historische Methode und Sozialwissenschaft", S.207–210.

(71) Simiand, "Historische Methode und Sozialwissenschaft", S.211.

(72) Simiand, "Historische Methode und Sozialwissenschaft", S.214 f.

(73) Simiand, "Historische Methode und Sozialwissenschaft", S.216.

(74) Simiand, "Historische Methode und Sozialwissenschaft", S.218.

(75) Seignobos, *La méthode historique*, pp.136–137.

研究は現象の一時的な例や一時的な場合の叙述や分析では不可能だとする。第四に、歴史的方法是連関を科学的な意味で立てられないとする。個別事例や唯一の社会に限定すれば連関の構築は不可能であり、規則性が存在し連関が繰り返される場合にのみ、「因果関連」は存在するからであるという。シミアンは、歴史家が連関を好むのは、制度や社会現象よりも「社会の全体性」の方が具体的・実際的であると思われるためだとする。現実にはこの連関は社会現象の一つの抽象であり、シミアンは歴史的方法に対して「分析的比較的研究」モデルを強調するのである。⁽⁷⁶⁾

第4節 個性（人間の行為）か比較か？

こうして歴史的方法と社会科学的方法との間の議論は最終的段階へと進む。

歴史的事実は「相反する二つの側面」から、すなわち、「個別的、特殊的、一時的なもの」と「集団的、一般的、継続的なもの」から考察できる。第一の見方に従えば、歴史は「過去の人に生じた偶発的な出来事の連続的な読み物」であり、第二の見方に従えば、「人間の継続的な習慣の一覧表」ということになる。セニョボス／ラングロアによれば、「完全な歴史構成は、両者の観点からの事実の研究を前提とする」。とはいえ、セニョボス／ラングロアが主張するのは、「人間の思考や生活や行為の習慣」を描き、「すべての人間の行為をひとつにまとめて、そこから共通するもの」を引き出しても、「最終的には排除することのできない何かが残る」、これこそ「まさしく歴史の要素」だという点である。すなわち、「ある種の行為は、特定の人間ないし人間集団の特定の時点における行為であった」という事実である。こうして歴史学は、「一般的な事実の研究と特殊な事実の研究との双方を調和結合することを余儀なくされる」⁽⁷⁷⁾。

一般性と特殊性の双方の複合性をいいつつ、セニョボス／ラングロアは歴史的事実の特殊性を重視していることが明らかとなろう。言語、宗教、非公式的慣例、政治制度など、ひとまとまりの歴史的习惯の研究に一般的な枠組みを適用する前に、まず必要なことは、これらの習慣は「いったい誰のものであったか」、「その習慣を実践した集団を決定すること」だという。集団の性質と範囲を正確に知ること。「どのような人間から成り立っていたのか、その人びとを結びつけた絆は何か、その人びとは、共通するどのような習慣を持っていたのか、どのような行動において他の人びとと異なっていたのか、ということである」。「そうなるのはじめて、その集団のどの習慣が研究を限定する枠として利用できるかがわかるであろうし、事実の種によって集団の種を選ぶことにもなるであろう」。こうして、特定の時代、特定の場所における一つの習慣ないし全体的な習慣を、分類表に従って系統的に研究することが可能となるという。⁽⁷⁸⁾

この伝統的歴史学の方法に対してシミアンは、素材は「精神によって抽象化され、分類され、秩

(76) Simiand, “Historische Methode und Sozialwissenschaft”, S.201–204.

(77) セニョボス／ラングロア『歴史学研究入門』, 194頁。

(78) セニョボス／ラングロア『歴史学研究入門』, 195頁以下。

序づけられる」ので、「精神的な立場」、研究し組織化する「構想」こそが「作業の魂」とであると強調する⁽⁷⁹⁾。その上でシミアンは「比較可能な研究」を対置する。「まずは最も明白に見える現象に制限し、最も簡単に証明できる関連に制限し、徐々にのみ複雑な関係に接近する」。「直接ある結果をもたらず課題に集中」し、方法は「すでに今、手に入る諸問題」で試みなければならないという⁽⁸⁰⁾。

こうしてシミアンは、歴史家の三つの偶像というものを放棄することを提案する。

第一の歴史学の偶像は「政治的なものの偶像」であり、これによって出来事に過大な意義が付与され、偶然の影響を体系的に排除できないため、規則性や法則性の把握が不可能になるという。第二の偶像は「個々の人物の偶像」であり、これによって制度、社会現象、関係の研究がなされなくなる。第三の偶像は「年代記の偶像」であり、これによって歴史家は制度や民族の起源を探し求めてしまう。シミアンの年代記偶像批判から浮かび上がるやり方は、最初に普通の類型を探して理解し、それから制度を説明できる起源に戻り、最後に他の形態を扱うこと、歴史的な出来事を系譜的に説明できる類型をあらかじめ規定することによって、過去の現象に立ち戻ることである。そのため「経験的な方法」に代わって「実際に批判的な方法」を強調する⁽⁸¹⁾。

伝統的な歴史学に代わってシミアンが主張する研究方向は、「学問的説明に達しようとする人間の現象の実証的・客観的研究」であり、「社会科学の意識的発展」をめざす傾向である⁽⁸²⁾。

おわりに

シミアンの研究と歴史学への批判的姿勢に対し、アナル学派の創始者であるマルク・ブロック Marc Bloch (1886–1944) とリュシアン・フェーヴル Lucien Febvre (1878–1956) は強く共感した。彼らはシミアンの手法に、彼らが求める「新たな歴史学」の一つの具体的な実現の形を見出したのである。フェーヴルはシミアンに宛てた書簡のなかで、シミアンの研究を賞賛し、雑誌『アナル』の創刊にあたって協力を求めている⁽⁸³⁾。

フェーヴルは論稿「歴史学、経済学、統計学」(1930年)において、現代の経済の実情を把握する上でシミアンの機能的な方法、とくに統計学の重要性を指摘している。現代においてはまさに経済的次元が最も重要であるからである。しかし同時にフェーヴルは現代ではなく過去の社会を眺めようとすれば、この方法で良いのかどうかを自問し、シミアンを批判する。「この方法はわれわれには正

(79) Simiand, “Historische Methode und Sozialwissenschaft”, S.220.

(80) Simiand, “Historische Methode und Sozialwissenschaft”, S.222 f.

(81) Simiand, “Historische Methode und Sozialwissenschaft”, S.224–227.

(82) Simiand, “Historische Methode und Sozialwissenschaft”, S.228.

(83) «Une correspondance entre Lucien Febvre et François Simiand à l'aube des Annales», *Vingtième Siècle. Revue d'histoire*, no.23, 1989, pp.103–110. これは、1928年2月から1930年8月の間に、シミアンとフェーヴルの間で交わされた6通の書簡である。

当なものと思われる。しかし、本当に正当なのだろうか。経済的次元とはまったく異なる次元に成り立つ社会のなかに、経済的事情を基盤とし、経済的意味を備えた階級——つまり現代の産物——を定めようとするとき、実際には、恣意的で見かけだおしの不毛な作業をしているのではないだろうか⁽⁸⁴⁾」。

それに対してシミアンは、「新たな歴史学」を体現する雑誌の創刊に対して支持と協力の意思を示し、「歴史家と経済学者もしくは統計学者の関係と協力の組織化と発展」が望ましいと述べながらも、1930年8月にフェーヴルに宛てた書簡のなかで、フェーヴルの価格史に関する研究への理解が自らのそれとは異なるとして、実質的な研究協力に関してはやや距離をおいている⁽⁸⁵⁾。伝統的歴史学への明確な批判姿勢を示しているシミアンの研究が、誕生したばかりのアナール学派に理論的な支柱を与えてくれると確信していたフェーヴルらと、「経済学者」であり「社会学者」であると自己認識していたシミアンの間には温度差があったのである。

にもかかわらず、シミアンの研究は、経済学や社会学においてよりも、その後の歴史学に大きな影響を与えることとなった。ブロックが歴史学の営みにおいてシミアンを評価したのは『歴史のための弁明——歴史家の仕事』(1941年、リュシアン・フェーヴルへの献辞)においてである。ブロックは、過去の人間の行為と現在の人間の行為の大部分の認識がシミアンによって「痕跡による認識」として特徴づけられていること⁽⁸⁶⁾、人間諸科学が抽象、想像力を基に行なう諸事象の認識(=分類)の問題においてもシミアンがすでに提起していることに言及する⁽⁸⁷⁾。ブロックは歴史的認識の道具としての因果関係の利用という問題においてもシミアンを扱う。条件と原因の厳密な区別を試みたがこの区別は相対的なものとみなした研究者としてシミアンを取り上げ、「視野」を研究の観点に従属させているとみなす⁽⁸⁸⁾。ブロックは、歴史において唯一の原因、とりわけ動機に固執することを戒め、原因は前もって仮定するのではなく、模索するべきであると主張する⁽⁸⁹⁾。

アナール学派の第二世代の歴史家として位置づけられるフェルナン・ブローデル Fernand Braudel (1902–1985) が最初にシミアンを評価したのは、1940年代はじめの未公開の講演テキスト「世界を探し求める歴史学」においてである。ブローデルが自らを位置づける「深い歴史学」の「由来」を、

(84) Lucien Febvre, «Histoire, économie et statistique» in: *Annales d'histoire économique et sociale*, 2, no.8, 1930. 邦訳「歴史学, 経済学, 統計学」A・ビュルギエール編『叢書「アナール 1929–2010」』第I巻, 井上櫻子訳(藤原書店, 2010年), 76頁。

(85) «Une correspondance entre Lucien Febvre et François Simiand à l'aube des Annales», pp.103–110.

(86) March Bloch, *Apologie der Geschichtswissenschaft oder Der Beruf des Historikers*, 2. Aufl., Stuttgart, 2008 (1997²), S.63. 邦訳, マルク・ブロック『歴史のための弁明——歴史家の仕事』松村剛訳(岩波書店, 2004年), 37頁。

(87) Bloch, *Apologie*, S.164. 『歴史のための弁明』, 126頁。

(88) Bloch, *Apologie*, S.210. 『歴史のための弁明』, 169頁以下。

(89) Bloch, *Apologie*, S.211–214. 『歴史のための弁明』, 170–174頁。

「出来事の歴史」という表現そのもので伝統的歴史学を批判したシミアンに求めたのである。⁽⁹⁰⁾その後、『地中海』（1949年）において「出来事史」からの決別に関してシミアンの影響を認めている。⁽⁹¹⁾1958年の「長期持続」論稿において、再度ブローデルはシミアンに言及する。「短い時間、個人、個別の出来事を扱ってきた伝統的歴史学」に対して、「周期変動、その持続に注目した周期変動」についての歴史叙述、「長期持続の歴史学」として評価するのである。⁽⁹²⁾さらに「歴史学と社会学」（1958-60年）においてブローデルは、歴史学が「人間に関するありえないほどの総合的な科学」として自任する先駆者の一人としてシミアンを位置づける。⁽⁹³⁾

また、同じくアナール学派第二世代のエルネスト・ラブルース Ernest Labrousse（1895-1988）は、シミアンの強い影響を受けて物価や所得の変動を分析し、『18世紀フランスにおける物価ならびに所得の変動分析試論』（1933年）、⁽⁹⁴⁾続いて『アンシャンレジーム末期とフランス革命初期におけるフランス経済の危機』（1944年）⁽⁹⁵⁾を發表し、数量史を大きく発展させた。ラブルースは後に、「私のシミアンとのかかわりは何よりも方法論的なもの、つまり本質的なものであったといえる。彼のことは直接にはほとんど知らなかった。（中略）私にとって彼は、実証主義の賞賛すべき創立者である」と述べ、⁽⁹⁶⁾シミアンから強い影響を受けていたことを認めている。その後も、フランスにおける数量史は、ピエール・グベール Pierre Goubert（1915-2012）やピエール・シヨニュ Pierre Chaunu（1923-2009）⁽⁹⁷⁾らによって⁽⁹⁸⁾興盛し、こうした状況についてイギリスの経済史家ドナルド・コールマン Donald Coleman（1920-1995）は、「アナール学派は個人と出来事の専制から解放されたが、今度は危機とサイクルの専制に従うようになる」と皮肉っている。⁽⁹⁹⁾

20世紀初頭のフランス歴史学界において、歴史学の方法論や歴史叙述をめぐり、さまざまな議論

(90) フェルナン・ブローデル「世界を探し求める歴史学」（1940年代はじめ）『ブローデル歴史集成 II 歴史学の野心』浜名優美監訳（藤原書店、2005年）、60頁。

(91) Fernand Braudel, *La Méditerranée et le monde méditerranéen à l'époque de Philippe II*, tome II, Paris, A. Colin, 1966, p.213.

(92) フェルナン・ブローデル「長期持続」（1958年）『ブローデル歴史集成 II 歴史学の野心』浜名優美監訳（藤原書店、2005年）、195頁。この間にブローデル自身の時間概念と構造概念の変化がみてとれるが、これについては別稿に譲る。

(93) フェルナン・ブローデル「歴史学と社会学」（1958-60年）『ブローデル歴史集成 II 歴史学の野心』浜名優美監訳（藤原書店、2005年）、236頁。

(94) Ernest Labrousse, *Esquisse du mouvement des prix et des revenus en France au XVIIIe siècle*, Paris, Dalloz, 1933.

(95) Ernest Labrousse, *La crise de l'économie française à la fin de l'Ancien Régime et au début de la Révolution*, Paris, PUF, 1944.

(96) «Entretiens avec Ernest Labrousse», *Actes de la recherche en sciences sociales*, vol.32-33, 1980, p.112.

(97) シヨニュもまた、「私はシミアンの理論に魅了された」と述べている。Pierre Chaunu/Edgar Marin, «Histoires locales, histoire globale», *Communications*, no.41, 1985, p.219.

(98) Groh, *Kritische Geschichtswissenschaft*, S.77.

が交わされていた。⁽¹⁰⁰⁾学問的に深い影響をフランスの歴史家たちに与え、普仏戦争では敵国となった隣国ドイツに後れをとっていた歴史学を、確固たる学問として確立しようとするフランス歴史学界の動きのなかで、大量の連続的な数値データを拠りどころとして「科学的」な歴史学をめざしたシミアンは、その後の歴史家たちに大きな示唆を与えることとなった。しかしその後の世代、たとえばエマニュエル・ル＝ロワ＝ラデュリ Emmanuel Le Roy Ladurie (1929-) においては、シミアンは忘却されていくことになる。⁽¹⁰¹⁾

その後のフランス歴史学の展開においては、言語論的転回や文化史的転回の波が押し寄せることとなる。この問題については稿を改めて検討せざるをえないが、本稿を終えるにあたり、フェーヴルのシミアン批判を引用しておきたい。先に引用した「歴史学、経済学、統計学」論文の箇所はすぐ後である。シミアンの社会科学的方法のもつ問題性に対するフェーヴルの批判は、同時に近年のフランス歴史学の転回のもつ問題性に対する批判を先取的に暗示している。

「つきつめれば、これは歴史学の精神や、歴史家の個々の仕事を否定するものですらある。というのも、結局のところ、過去にはまったく未知のものであり、理解されることも、認められることもなかったようなことにもとづいて、過去の内的構造を事後的に作り替えたり、再構成したりするのは、過去を理解することではなく、過去の重要な側面を変質させることだからである」⁽¹⁰²⁾。

要旨: 歴史学と一口にいてもさまざまなアプローチの仕方がある。どのように過去の事実に接近するのか、その事実性も含めてこれまでさまざまな議論がなされてきた。多様な議論を突き詰めると、人文科学としての歴史学と社会科学としての歴史学の対立という問題に遭遇する。とりわけフランスでは社会科学としての歴史学への転換が早い時期にみられ、また、数量化へのアプローチが鮮明であり、その意味でこの対立は先鋭化していたように思われる。本稿では、人文科学から社会科学への歴史学への転換に際して、フランスではどのような議論が闘わされてきたのかを、社会学者で経済学者であるフランソワ・シミアンの研究を通して考察する。

キーワード: 伝統的歴史学、ラングロア、セニョボス、シミアン、アナール学派、数量化

(99) Donald Coleman, *What has happened to Economic History? An Inaugural Lecture*, Cambridge, Cambridge University Press, 1972, p.26.

(100) この点に関しては、渡辺和行『近代フランスの歴史学と歴史家——クリオとナショナリズム』（ミネルヴァ書房、2009年）第五、六章に詳しい。

(101) Emmanuel Le Roy Ladurie, *Le Territoire de l'historien*, Paris, Gallimard, tome I, 1973, tome II, 1978. 邦訳『新しい歴史——歴史人類学への道』樺山紘一他訳（藤原書店、2002年）。

(102) フェーヴル「歴史学、経済学、統計学」、76頁。